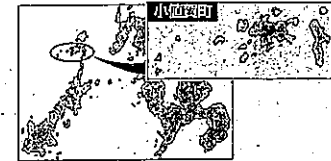


# 少子化逆手に質高く

ニエス 最前線  
ながさき

北松小値賀町が小中高一貫教育の本格実施を始めて10年目を迎えた。児童生徒数の減少に伴い、教員の配置数も減る中、一貫教育で島の教育の質を高めることが目的。これまで町立小値賀小・町立小値賀中の児童生徒が同じ授業を受けたり、学校間を教員が行き来し入員不足を補い、さらして学校間の垣根を低くしてきた。

異教員がこのほど明らかにした4月実施の全国学力テストの市町別では、西彼長与町と共に小値賀町が、小中学校いずれも教科では全国平均を上回った。町教委は取り組みの成果と分析。また、町内の県立北松西岡も、1学年十数人だが、国公立を含む4年制大学に例年複数の生徒が合格している。学校を訪ね、離島における教育について考えた。



小値賀小6年の音楽の授業を指導する小値賀中の音楽担当の講師(左) 小値賀中

当初は戸惑い  
人口約5,000人の小値賀町は、五島列島の北部に位置する離島。町内には小中高各一校ずつ、児童生徒数は、▽小値賀小38人(分枝含む)▽小値賀中46人▽県立北松西岡高校11人、合計しても約100人程度に過ぎない。今後の少子化進行を懸念される状況を示唆に、一貫教育は2008年度から本格実施が始まった。

推進部の事務局総務担当 釘島正智・同高教頭(左)は「10年前の、再教育導入当初は、学校の垣根がうまくいかず戸惑い」ことも多かったが、その後、協議を重ね互いに理解を深めた」と語る。

ある、しかし合同授業をしておけば、児童は事前に中学の雰囲気や分かれ、不安の解消が図れる。16年度は安野と園田で計10校の合同授業を実施。和歌山県の和歌山やアルファベットの発音などアルファベットの発音など一貫教育で児童生徒が「音」を学ぶ。また、同じ17年生から英語の授業を取り入れた。町内の競争心も抑えておき、初級国語から英語に親しむ環境づくりにも取り組んでいく方針だ。

高い進路実績  
児童生徒の数が少なければ、一人一人にかな指導ができる反面、配属される教員数も増える。振替を担う教員の人数は▽町立小分枝含む11人▽町立小同高13人。1人への教員が専門外の科目も合わせて教える場合もあり、人員が豊後市都市部に比べ、教員の負担が増える。学校の責任が増える。学校の教員が行き来する。乗入れ授業を担う羽山郷史教諭(30)は「子どもの数が少ないと、教員の指導力も十分に発揮し反映するプレッシャーはあつた」ながらも「小中の先生の指導力、子どもたちは家庭学習の習慣がある。同高の指導力も、親の協力があつた」と語る。

同町では翌年の子ども園の段階から高学年まで、同じ着式の個体服装を引き継ぎ、個別の指導計画を立てていく。このうち学習面では文章の読み取り能力、推測する力などを記入。学校間で児童生徒の情報を交換して、具体的な指導方針を交わすこともある。

同小・同中は、同じ校舎にあり、音楽室や美術室を共有。同高までの距離は徒歩数分。行き来は容易だ。



アルファベットの発音をテーマに小値賀中1年の生徒(右)と小値賀小6年の児童が合同で学ぶ授業の様子

## 教え方も学ぶ合同授業

一貫教育では、年代が違っても子どもが近い、同一の課題を学ぶ時間がある。授業をそのようにした。ニエスは、くすくすと笑うような感じで、小値賀小、小値賀中共有の教室では、中学1年生と小学6年の計約20人が、英語の合同授業に臨んでいた。テーマは、アルファベットの発音。イラストと英語単語が記された紙を手に、中学生が隣の小学生に指導して

子どもが近い、同一の課題を学ぶ時間がある。授業をそのようにした。ニエスは、くすくすと笑うような感じで、小値賀小、小値賀中共有の教室では、中学1年生と小学6年の計約20人が、英語の合同授業に臨んでいた。テーマは、アルファベットの発音。イラストと英語単語が記された紙を手に、中学生が隣の小学生に指導して

「17年生は先駆者だからやりやすい」とも話している。同高の英語担当、平井那都(28)は「17年生は先駆者だからやりやすい」とも話している。同高の英語担当、平井那都(28)は「17年生は先駆者だからやりやすい」とも話している。

同中の英語担当、平井那都(28)は「17年生は先駆者だからやりやすい」とも話している。同高の英語担当、平井那都(28)は「17年生は先駆者だからやりやすい」とも話している。

## 教員が学校行き来 情報共有し細やか指導

同中から島に進学したのは、まだ1人だけだ。さらに、16年度の同高卒業生15人の進学先を見ても、4年制大学と国公立大学、私立大学がそれぞれ1校ずつ、合計4校。残りの11校は規模が小さい。島外、離島の合格を求めた進路状況は高い実績として評価できる。本校の高校に進学した場合は、費用は町が負担する。合費負担でも1万円に数万円の支出が見込まれる。自らの進路で島内の高校で希望の進路を実現ができるならば、それは嬉しいことではない。

不利の克服  
少人数だと生徒の競争心が起きないという。一緒に過ごすメンバーが入れ替わらないことでコミュニケーション能力への影響も多められる。このため町では、島外から同小・同中へ「ふるさと留学制度」を計画し、大口増へつとよと環境整備を進める。同小の酒井元治校長は「島外からの留学生や研修生などで訪れる生徒と触れ合える機会を増やすことで、少人数のデメリットを少しでも解決できる」と語る。

平井那都(28)は「小中学生は発達段階が異なる。指示の出し方についても難しい。中学生に教える小中学生も教えることを知ったという感覚があった」と振り返る。一方、「小学校で学ぶ内容も、中学生と分かっていることで、中学生指導を継続しやすい」と利を挙げる。

町教委は、校長が今は小中兼任しているため、いかなる相談をしながら進められる。義務教育学校で教員が一人になることに伴う指導などを考える。今の形態を残したほうがよいという。